

人生を拓く

53

薦田文子さん(90)
 南町1

富山県出身の故木本千代太郎さん(昭和32年、56歳で没)、やぶさん(同35年前後同)夫婦の7人兄弟の2番目として羽幌町で生まれ育ちました。

5・5畝の大農家で約50人の小作を抱え、お嬢さま育ちだったそうです。「田植えしても稲刈りしても私が一番。でも束ねるのは父親には負けてた」。

地元の高等小学校を卒業後、町内の洋裁店に見習いとして就職。洋裁教授の免許を取得しました。24歳の時に結婚、長女(64)札幌市在住をもうけましたが、夫は2年後に病死。実家に戻って農家を手伝い、29歳で当時旭川市内にあった中央洋裁学校に入り、寮生活に。

「このころが一番楽しかった。紳士ものでも何でもできたの。新年会は、おいしいご飯を作ってくれる所でやったの」。学校から派遣されて妹背牛、和寒、乙部、朝日など各町の洋裁学校に教師として出向いた日々も充実していました。

1年後、網走に嫁いでいた妹が2人の子を残して早逝し、世話するために実家に帰って間もなく再婚。3人の子をもうけました。
 「夫は着流しを来て毎晩飲みに出るんだけど、映画の俳優よりも良い男だったよ」。しかし家庭を顧みなかったといい、35歳ごろ、子供達を連れて旭川へ。時の流れも感じる暇がないほど必死に暮らした日々でした。



「マルカツ(旭川市3条7丁目)の魚屋さんで働いたの。でもお給料は9万円だった」。賃金が安く、家族を養うための待遇の良い働き口を求めて、旭川市内の中心部から天人閣(天人峡温泉)まで80キロ以上を歩きました。そこで採用されたため、生活も安定しました。
 その後笹寿司に勤め、54歳の時に自転車店を営んでいた1歳年上の実さん(平成19年、71歳で没)と出会ってようやく平穏な日々。家業の自転車修理の腕前も板に付くようになりました。
 実さん亡き後から始めた書道で12年後には10段教授になり、自宅で教室を開くほどに。7年半、町の文化団体連絡協議会役員も引き受けて活動しました。
 そのころから始めた新聞配達は7年半続け、「夜の10時に出て、新聞を配り終えて帰宅するのは午前8時から8時半。雪降って自転車が動かなくなると、歩いて町中に配ったこともあったのよ」。苦労を厭わなかった甲斐あって、今も元気な日々。毎日朝、夕1時間の読経も欠かしません。

俳句

秋彼岸テールランプが点灯す
 吾亦紅写真の父はいつも端
 遠大な空想のせて秋の雲
 過ぎし日や土間を匂わす濁り酒
 明日は晴れはぐれ鳥泣くな秋の夕
 黍嵐過ぎて倒れし三、四本
 風の野や戯れているこぼれ萩
 割箸も焦げてほどよき秋刀魚かな
 そういえばこんな風だった吾亦紅
 茜の地平線とんぼう溢れ出す
 八月のサンバ流るるMRI
 夜雨明けに読みたくなる賢治童話
 風めぐる猫の眼差し秋の蝶
 天高し母になる日よさらし帯
 初嵐刺さった棘よ飛んでいけ

由川 真人
 小林 ろば
 杉山 ひろのり
 杉山 りつ
 こばやし 星来
 横田 則子
 高瀬 潤
 石澤 清宏
 三島 智
 若田 郁
 本田 咲
 佐々木 りえ
 斎藤 夕桜
 山内 みゆ
 八田 昌代

